

# 大禮記念京都大博覧会ポスター

昭和3年(1928)、昭和天皇の即位を記念して開催された大禮記念京都大博覧会は、京都市あげての大イベントであった。現在でも京都市美術館などがある岡崎を第1会場、二条駅そばの刑務所跡地を第2会場、東山の現京都国立博物館を第3会場として、大規模な博覧会が開催された。この博覧会を機に京都市が募集したポスターは、一等が中島五郎によるもので、二等が舞楽をモチーフにした上野正之助によるもの、そして、三等が大槻孝二によるものであった。

採用されたこれらのポスターのうち、一等と三等のものは美術工芸資料館の収蔵品にもなっている(図1、図2)。二等のポスターは残念ながら収蔵していないが、じつは、この二等のポスターについては、興味深い事実が知られている。それは、二等に当選したポスターの図柄が、そのままマッチのラベルに転用されて博覧会の宣伝メディアとして用いられたことである。博覧会にかかわるさまざまなデータをまとめた『大禮記念博覧会誌』(京都市役所、昭和4

年)には「懸賞ポスター圖案二等當選萬歳楽圖案をレツテルにした懐中マツチを十萬個作り市内のカフェー其他に配付したる外贈呈袋にも入れ、又十一月の京都驛前及び寺町御門の入浴者入場勧誘の宣傳用にも使用せり。」とある。ポスターと同じ図柄の10万個のマッチが博覧会のムードを盛りあげていた。一等でも三等でもなく二等の図柄がマッチラベルに採用された理由は記されていないが、二等の舞楽の図柄が、他の二点に比べてシンプルであり、小さなマッチラベ



図1 AN.5384-7

ルの図柄に適していたと判断されたのではないだろうか。そして、このような例は、この時期には珍しくなかったようだ。

昭和10年秋に開催された始政四十周年記念台湾博覧会の開幕までの経緯を報じる「台博ニュース」の第3号(昭和10年5月16日発行)には、博覧会宣伝用マッチについて「一面には台湾の景勝地を入れ、他面は料亭、旅館、カフェーその他の注文先の広告面となる。形は大型ポケット用、総数實に百萬個」とあり、台湾博覧会開催に向けて、百万個のマッチが用意されたことがわかる。この博覧会では、内地(東京)に依頼したポスターを三種類三回にわけて作成しているが、それとともに、台湾の名勝とさまざまな店を印刷したマッチが内外に配付された。とくに、この場合は、博覧会主催者側が広告主を募ってマッチの作成を一括しておこなっている点が興味深い。

つまり、昭和時代の初期には、ポスターとともにマッチ(のラベル)が、重要な宣伝メディアとして認識されていたのである。現在ではライターに押され、また、電化や禁煙の動きにより見かけることも少なくなったマッチが、広告媒体として重要な位置を占めていたのである。

美術工芸資料館では、デザイン資料として、1967年におよそ千枚を超えるマッチラベルのコレクションを購入していた。2011年度に、このマッチラベルのコレクションを用いて、学芸員資格科目である博物館実習受講生による企画展示「手の中の世相—マッチラベルコレクション—」を開催したところ、マッチラベルを収集している数名の方からコレクショ

ンの寄贈、資料の提供を受け、現在では文字通り枚挙にいとまのない数のマッチラベルを収蔵している。

これらのマッチラベルについては稿をあらためるとして、ここでは、冒頭にあげた大禮記念大博覧会のポスターを見てみよう。

一等になったポスターと三等になったポスターとは、対照的な雰囲気をもっている。

一等のポスターは、アール・デコ全盛のこの時期の特徴をいかになく発揮したパビリオンが林立するさまを中央に配して、さらにそこから光が上空に放たれる様子をあらわして上昇感を強調している。寒色系の色と暖色系の色を組み合わせ、さらに、光や中央の文字にはピンク色も用いるという色調は、博覧会のもつ祝祭的な気分になっている。よく見れば円光のような文字部分続きには四神やいかにも京都風の文様に気がつくが、全体のイメージは、あくまでも新しい時代の到来を祝福するものになっている。

一方で三等のポスターは、おなじように明るい色合いではあるが、全体は黄色から茶色のトーンで統一されている。中央に赤茶色で大きく「大禮記念京都大博覧会」の文字を配し、そのうえに紫宸殿をあらわす。文字はあたかも紫宸殿の前庭に書かれているかのようである。そして、周囲には、右上に第1会場、左上に第2会場、そして、下部の「京都市主催」の文字の下に京都駅とその右に第3会場を描いている。つまり、ポスター全体が京都の地図になっており、その中央に紫宸殿があるという構図だ。いかにも

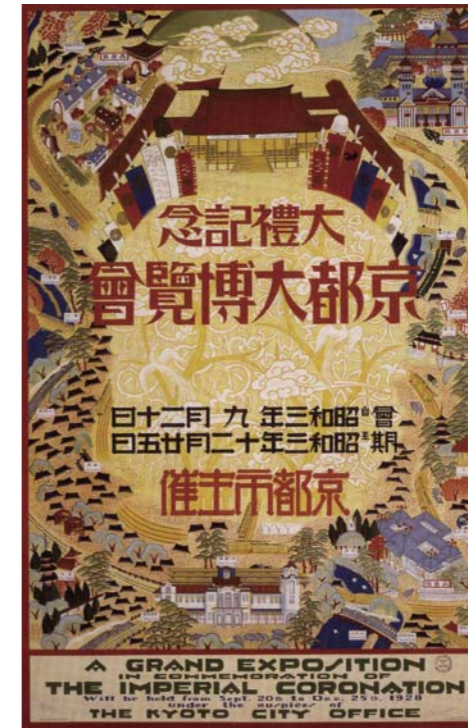


図2 AN.4855

大禮記念にふさわしい構成ともいえる。そして、俯瞰的にとらえた京都のまちは、金雲を思わせる色調とあいまって洛中洛外図のイメージにつながる。

16世紀の初頭に成立をした洛中洛外図は、当初、京都を理想的な「みやこ」として表象するものであった。そこでは、東には桜の咲く春の景色、南には夏の祇園祭、西には紅葉の嵐山、北には雪を冠した北山というように、四方と四季が

重ね合わされた理想郷のイメージが現出していた。しかし、次第に、京都の最先端のファッションブルな風俗の方が人びとの関心を引くようになり、名所につどう人びとの様子が克明に表現されるようになる。そして、やがては東山遊楽図、四条河原図、歌舞伎図などさまざまな風俗画が、洛中洛外図を母体として成立することになる。

大禮記念京都大博覧会の一等等のポスターは、洛中洛外図の世界とアール・デコの建物群というように、ある意味で、理想郷としての京都と最先端の京都という、京都のもつふたつの側面を見事にあらわしているともい

える。

この2点のポスターは、2012年10月3日から11月25日まで京都大学総合博物館で開催された、京都・大学ミュージアム連携合同展覧会「大学は宝箱!—京の大学ミュージアム収蔵品展—」に、京都工芸繊維大学美術工芸資料館を代表する作品のひとつとして出品された。

(美術工芸資料館：並木誠士)